

シンポジウム②

「中医学で難病に挑む」(座長：西森婦美子、戴昭宇)

(1) 「疑難病に対する中医学治療経験」

清水雅行

(清水内科外科医院)

西洋医学的に難治である疾患に対しても、中医学的治療が奏功することはよく経験するが、一方で難渋することも多い。西洋医学的「難病」に対し、中医学的には「疑難病」と称される。今回、この疑難病に対する中医学治療について、少ない経験からではあるが私見を述べさせて頂く。

疑難病の病機は以下のような特徴を有する。

1. 病因が錯綜する

病因が单一であることが少なく、六淫中のいくつかの淫邪が同時に侵襲する、痰・飲・瘀・血・水・湿などが共に存在する、正虚を兼ねる、情志が挾雜する、飲食劳倦の因子が加わるなど、種々の複合病因が存在し交錯する。

2. 病情の変化が多い

病情が遷延すると経過と共に熱証が寒証に転じる、実証であったものが虚証になる、瘀久しければ痰を挟む、熱盛なれば毒を成すなど、多様に変化する。

3. 病機が相反する

同一病人において、上熱下寒、上寒下熱、表寒裏熱、表熱裏寒、虚実併見、表虚裏実、上实下虚、陰陽両虚など、相反する病機を呈する。

4. 弁証論治の誤りが加わる

弁証論治を誤ると、さらに病機を複雑化させる。

治法においては、特に以下を重視する。

1. 活血化瘀法

古くから「久病多瘀」と言われ、現代において多くの医家が「久病血瘀、瘀生怪病」と認識している。長期治療しても治癒しないものには、活血化瘀法を応用する。

2. 去痰法

「怪病多痰」とも言われる。気滞血瘀に由来するものは、「痰瘀同源」と表現されるが、治法には燥湿化瘀・清熱化痰・去風化痰・逐瘀薬などを用いる。

3. 頑病に虫薬

虫薬はその性が峻烈で、入絡搜邪の特徴を有する。長期治療でも無効の場合などに全蝎・蜈蚣・僵蚕・地竜・水蛭・露蜂房などを用いる。

4. 疑難久病には必ず扶正を行う

経過が遷延すると、元来本虚のところへ邪気が虚に乗じて入り、さらに病期が長引く。そのため殆どは虚証が主であるか、または虚実挟雜である。従って多くの疑難病において、扶正法は広汎に用いる必要がある。

5. 脾胃を重視する

多くの疑難病が脾胃と密接に関係し、また遷延すると脾胃に影響を及ぼす。あるいは脾胃虚弱であると正気が衰え、さらに難治となる。また、誤診誤治により中焦に痰飲が停まり、昇降失調、気機阻滯により嘔吐泄瀉を來し更に脾胃を弱める。従って、まず脾胃を顧慮することは治療の糸口となる。

6. 中西医学両者の思考方法を広く受容する

疑難病の弁証論治は中医学的思考法を元に行うのは当然であるが、正確な西洋医学的診断を得ることにより、中医学的弁証論治の精度を高めることは重要である。ただし注意すべきことは、それらの結果に束縛されることなく、あくまで中医学的弁証論治を重視し、方薬の性味、昇降浮沈、帰經などを把握したうえで用いることを原則とし、その上で弁病治療と有機的に結合させることが必要である。

これらの疑難病に対する中医学治療上の種々の問題点と共に、自験例を呈示する。

プロフィール

清水 雅行

1989年3月 秋田大学医学部卒業

1994年4月 東北大学胸部外科(現心臓血管外科)入局、東北大学大学院医学
研究科入学

1995年1月 東北公済病院心臓血管外科勤務

1997年9月 東北大学大学院卒業、医学博士号取得

同年10月 国立水戸病院(現水戸医療センター)心臓血管外科勤務

1998年1月 東北大学病院心臓血管外科勤務

同年4月 国立仙台病院(現仙台医療センター)心臓血管外科勤務

2003年4月 仙台医療センター救急部・救命救急センターICU主任兼務

2005年10月 仙台市内で個人開業の清水内科外科医院継承

2006年1月 NPO法人中国医学研究懇談会設立

2008年12月 医療法人社団宏洋会設立

日本中医学会、日本東洋医学会、和漢医薬学会、東京臨床中国医学研究会、日本外科学会、日本胸部外科学会、日本心臓血管外科学会、日本循環器学会、会員。仙台中国医学研究会会长。NPO 法人中国医学研究懇談会理事長。